

国語科における書くことの指導法

－ 作文事例に基づく議論を通して －

国語教育専修 小林 一 貴

0. はじめに

このコースでは、研修教員が持つ書くことの学習指導法の課題に基づき、具体的な教材や実際に児童・生徒が書いた作文を取り上げつつ、実践を構想する視点から国語科の教育内容の検討をふまえた指導のあり方について議論し、理解を深めていくことを目的とした。

平成17年度までの研修では、主に作文事例を見ながら、「文種（ジャンル）」、「題材」の変遷を見ていくことを通して書くことの指導の現状について批判的に検討することを行った。書くことの学習は、学校生活や行事、日常生活、メディアによる情報などさまざまなところから題材をとることがあるため、作文事例と題材に着目した教材化の視点について問題にしてきたが、やはり具体的な教材をとりあげつつ議論していくことの必要を感じた。それをふまえ、平成18、19年度の研修の進め方については、教科書教材や実際に書く活動を取り入れるなど、書くことの学習を構成する要素を取り上げながら多面的に学習指導の方法の考え方について議論していくこととした。

1. 実施方法とその実際

基本的には本誌の第2号において述べた方法を踏襲しつつ進めた。

第1日目から5日目までの大まかな流れは以下の通りである。(平成18、19年度)

第1日目

午前：研修教員の問題意識に基づく議論、実習、教材分析等

午後：AIMS-Gifuの活用方法と具体的なコンテンツの視聴、議論

第2日目～4日目

AIMS-Gifuの「コース文書」に週ごとに新たな資料を載せ、それに基づいた議論を「掲示板」上で行い、研修教員各自の課題をそれぞれの状況に応じて具体化する。

第5日目：9月2日（金）

AIMS-Gifuにおける4日目までの議論をふまえ、現在行われている書くことの学習指導の方法を複数取り上げ、教育内容の点から議論を行う。

○第1日目

午前、研修教員が学校、教室の様子や、取り組みの実際について語る時間を設けた。日頃の指導上の問題点を相互にそれぞれの視点から出し合い、それに基づいて自由に情報や意見の交換

を行った。

平成18年度は、研修教員の所属が小中高にわたり、教材のとらえ方や指導上の問題意識も多様であった。校種の違いにより、国語科における書くことの指導についてのとらえかたも異なる（国語科として教えるべき内容の実態も多様）こと、またその理由についても意見が交わされた。実際に新聞の社説を要約する活動などを行い、書くことの学習では、文章に盛り込まれる情報だけでなく、それをめぐる全体的な情報が関わってくるといった基本的な点を確認した。

平成19年度は、研究教員は小学校に所属する方だけであった。それぞれの学校の場所も近いこともあり、地域の話題や子どもの様子、学校としての研究の特色など共有する観点から書くことの指導をめぐる情報交換、議論がなされた。また、研修教員が取り扱ったことのある教科書教材をとりあげ、国語科として教えるべき内容、指導方法、について議論を行った。

具体性を持たせた研修の導入を行うことに注意を払ったが、その際には研修教員の所属により第1日目を行うことに変化をもたせることが必要と考える。

午後は、教育学部内のPCの設置してある教室においてAIMS-Gifuの使用法の説明を行った。第2日目以降は、主にPCを用いて資料をめぐる議論を行っていくため、実際に「掲示板」に書き込む練習を行い、予め「コース文書」に載せておいた資料を見ながら意見交換を行った。

○第2～4日目

AIMS-Gifuに資料（平成18年度はスライドによる講義のコンテンツも併用。講義のコンテンツは、いずれも10～15分で作成した。）を活用して進めた。資料は毎週更新し、それについての課題を提示し、「掲示板」に書き込むかたちで議論を行った。

最初のうちは、第1日目の内容をふまえた書き込みも行われた。

（省略）

私は書く力をつけるために、毎日の帰りの会で、「100字日記」というものを生徒に書かせています。文章を書くことに抵抗を感じている生徒は多いです。その抵抗感をなくしていくためには、やはり普段から書き慣れることが大切かと思い、国語科の授業とは別に書かせています。毎日続けていると生徒の書く力というのがわかってきます。事実だけを書く生徒（1時間目は体育がありました。2時間目は国語がありました。・・・）、事実に自分の思いを書く生徒などがあります。文章を書く、ということは、単に文章の力だけでなく、個々の生徒の学習の力やその他の総合的な力などがあらわれと思います。いかがでしょうか。今回小林先生の資料の「芦田の作文観と事例」では、「生活と書くこと」の関連についての是非についてありましたが、今自分が行っている100字日記はまさにそれに当てはまる気がします。是非の議論があるということは、否定的な考え方もあるということですから、その根拠となるものを教えていただけたらありがたいです。100字日記を続けることで、書く力がついてきたのではないかと、思い始めているものですから、もし、是非の非の部分が多分にあるのであれば、2学期からは考えなおさなければいけないと思っています。ご指導よろしくお願ひいたします。

掲示板では、個別の課題に関してやりとりを継続して行うことも可能であり、そうした課題をコースで取り上げる資料に関連付けて振り返り、再検討することも行われた。ここでの「100字日記」については、「作文と生活指導」といった話題を研修の指導教員から提示し、個別の関心に即した資料などを紹介していった。

2. 掲示板における議論

第2～4日目に行われた掲示板の意見を取り上げる。

これは、「コース文書」内に載せた資料とそれに対する指導教員からの課題に基づいて書きこまれていく。そのやりとりの一部を以下に示す。

資料には作文教育に関する論や作文事例を載せた。次のやりとりは、生活作文に関連する作文事例として、雑誌『赤い鳥』に掲載されたものにもとづいて自由に意見交換されたものである。

件名：「くやしかつた事」の作文について（研修教員）

小林先生、ご指導ありがとうございます。

「くやしかつた事」の作文を読ませていただいた感想は、まず、事実を具体的に書いている点が印象に残りました。出来事が手に取るようにわかる文章です。たいへんわかりやすい文章ですが、それは一文一文が短い、というのもあるのではないのでしょうか。少し本題からずれてしまうかもしれませんが、生徒に文章を書かせる中で、よくあるのが一文を長く書くことです。中には400字の文章を2文か3文で書く生徒もいます。自分の思いを綴るときに相手意識を考えずに書いているとそうなるのかとも思っています。「くやしかつた事」の作文は、短い文で綴られているので、たいへんよみやすかったです。ただ、他の資料と比べて、どう違うのかといった点については、わかりませんでしたので、ご指導よろしく願いいたします。

これに対して、指導教員は次のような書き込みを行った。

件名：返信：「くやしかつた事」の作文について（指導教員）

『赤い鳥』に掲載された作文の文体の特徴として、(省略) 会話文が多いこと、劇の展開を思わせるような物語性といったことも指摘されています。

(省略)

一文が長くなる場合（私もそうなのですが）、そこには複数の視点が交じり合っ（いわゆる「文のねじれ」）しまうことが原因としてあります。そうした場合、作文に織り込まれる声や視点を整理することによって、読みやすい文章になるのではないかと考えられます。そのための方法として、一文が長くならないようにといった表現の仕方についての意識するにとどまらず、作文で取り上げられている題材について話をしたり、出てくる人が何を言い考えたかなどについて話をし合う機会をもつといったことも必要ではないかと考えるのですが、(省略)

作文事例についての解説とともに、研究教員の文の長さという観点から自身の指導する子どもの文章に結び付けて考えを進めていたため、作文の文体の特徴とその価値といった論点を示した。

次は、別の作文事例についての書き込みである。

件名：「おりえさんのをばさん」について（研修教員）

（省略）

今回の二つの文章は、人間模様がリアルに描写されていて、やはり今までのものと違う雰囲気がありました。子どもの文章に思えないものでした。こういった文章が掲載されるようになった経緯がやはり気になりました。今の子どもたちも様々な家庭の背景がありますが、もし、複雑な家庭環境をリアルに作文に書いてきたときに私は逆に困ってしまうかもしれません。そこに生活体験を文章に綴ることの問題があるのでしょうか。自分の周りの人間関係、生活環境を赤裸々に文章に綴り、それを誰かに読んでもらうのは、考えさせられるものがあります。

ここでは、児童・生徒の生活世界について国語科における書くことの指導はどのように関わるべきかについての論点を設定した。

第4日目では、作文の題材と課題のねらいについての議論を資料として載せた。これに関する意見としては次のようなものがあった。

件名：返信：追加資料について（研修教員）

資料を読んだの所感を述べたいと思います。

「仕事」・「社会」を扱う題材が少ないことや「評論的・実用的態度」があらわれていないといった、旧来の題材や内容についての改善ということで、新課題主義における課題法が提案されたことが資料から分かった。しかし、「我が家」という題で書く場合のポイントで挙げられていることを見ると、子どもの自由な創作意欲や独創的な捉え方などが尊重されなくなるのではないかと感じる。形式的な範を与えて、一定レベル以上の文章を書くことを求めているような気がする。いよいよ指導的な側面が強くなってきたように思える。私自身、素材（題材）について詳細に調べることは必要だとは考えるが、このように歴史的な経緯を見てきて、「書くこと」の指導によって何をめざすのか、あるいはどこに向かって進んでいくのか、強い興味を抱いている。また、現代の「書くこと」の指導のあり方について、第5日目の講義によって少しでも見えてきたらと思う。他の先生方の意見も伺いながら、また先生のご指導を受けながら、研修したいと思う。

件名：「題材の検討と課題主義」について（研修教員）

今回の資料についてですが、作文の課題の与え方など興味深いものでした。今、授業で作文等文章を生徒に書かせるときにただ単に課題を与えて書きなさいと言ってもなかなか書けません。文章を書く必然性をもたせないと意欲的に書けないものです。文章を書くことが苦手な生徒にとっては、その必然性がないと特に書けないものです。そこで、授業では、生徒が「自分の思いを文章に書きたい。」という意欲をもたせるような単元計画などの工夫が必要です。9月5日では、今回の資料のように今まで研究されてきたものをさらに小林先生にお聞きしたいと思いますがよろしいでしょうか。また、それぞれの先生方が行っている実践なども

お聞きできたらと思っています。今まで貴重な資料をありがとうございました。普段、なかなか目にすることができないものばかりで、たいへん興味深く、勉強になりました。9月5日もご指導よろしくお願い致します。

具体的な作文の題材と事例をふまえて、指導法へとつながる課題に関する議論を取り上げた。現在の書くことの指導が、なぜ今のようなかたちで論じられ行われているのかを振り返る、さらには個々の研修教員が自身の実践を考える枠組みを問い直すきっかけにつなげることを意図して資料と課題を設定してきた。しかし、第2日目では個々の問題状況につなげた議論がなされていたものの、第4日目ではどうしても指導教員の設定した課題の範囲内での議論が多くなってきていた。

3. 成果と課題

大学研修に関わる中で、当初より研修教員の問題意識に即していかにコースを進めていくかということについて考えさせられてきている。研修教員の勤務校に足を運びながら各自の問題意識の生じる具体的な状況や場面向かい合うことも行っていきたく考えるが、大学研修における各自の問題意識へのアプローチを具体的に即して明確にすることが必要となる。そのため、第1日目の導入をどのように行うかについて、構成員の特徴に応じた方法を工夫していきたい。

平成18年度では、所属の校種の異なる研究教員が参加することで、校種間の指導法に関する考え方や教材の扱いの相違、そして児童・生徒の学習の事実をとらえる視点の違いが明らかになった。また、研修期間の終了後においても教師の授業に対する意識の変化が見られたとの声が聞かれた。無論、各学校により文章表現の学習の目的や学習者の実態は異なる。しかし、学習者の書いた文章を見る視点や教育内容について各自の考えを出し合うことが、小中高を貫く視点を相互に共有し自覚することにつながり、国語科の授業において文章表現を指導することの根幹に関わる意識についての変容を促したことも確かであり、またそれが教員にとっても有益であったと考える。

また、平成19年度の場合は研修教員の所属校における状況により踏み込んだ研修をすすめるという方法をとることになった。

しかし、研修を進めていく中で、指導教員の設定した範囲で課題をこなし議論をするという傾向もみられる。いかに継続して個々の研修教員の置かれた状況に立ち返りながら展開していくかについては今後の課題としたい。